フィリピの信徒への手紙

～堀川寛による広島弁訳～

（*広島弁訳の意味*）　（訳者の解説・蛇足）

第1章

キリスト・イエス様にお仕えしとるパウロとテモテから、フィリピにおるキリスト・イエス様に包まれとるすべての聖徒たち、それと監督と執事たちへ。わしらの父である神様と主イエス・キリスト様から恵みと平安がありますように。

わしゃあ、あんたらのことを思うたんびに（*度に*）、神様に感謝しとる。あんたらのために祈るたんびに、喜びが溢れてくる。そりゃあのう（*それは*）、今日までのあんたらとの福音にある交わりのためじゃ。あんたらの中でエエことを（*善い業を*）はじめてくれんさった方が、キリスト・イエス様がもう一度来られる日までに完成されると、わしゃあ確信しとる。わしがそう思うんは当たり前よう。なんでかいやあ（*なぜならば*）、捕らえられとる時も、福音を語って立証する時も、恵みの共同体として心に留めるとるけえじゃ。わしが、キリスト・イエス様の愛の心で、あんたらのことをどれほど思うとるか、神様がよう知っとってじゃ。わしゃあこう祈る。「あんたらの愛が、知識と洞察力においてますます豊かになり、ほんまに（*本当に*）大切なもんを見分けることができるように。ほいで、キリスト様の日（再臨）には無垢で責められるところのないもん（*者*）となり、イエス・キリスト様から与えられる本物の実りに満たされて、神様の栄光と誉れをたたえることができるように。」

兄弟たちよ、わしの身に起こったことが、むしろ福音を前進させることになったことを知っとってくれえ。わしが投獄されとるんは、キリスト様のゆえじゃいうことは、ここにおる兵隊や他のもんみんなに知れ渡っとる。ほいで、わしが投獄されたことで、多くの兄弟らが主にうながされ、奮い立って、恐れることなく御言葉を語るようになったんじゃ。キリスト様を宣べ伝えるのに、妬みや競争心からするもんもおりゃあ、真心からするもんもおる。あるもんは、わしが福音のためにこうなったんを知って、愛の心で宣教し、他のもんは、ねじれた野望で宣教し、獄中のわしをよけいに苦しめようとしとる。そがいなことはどうでもええ！純粋の動機じゃろうとなかろうと、とにかくキリスト様が告げ知らされとるんじゃけえ、わしゃあそれを喜んどる。いや、大喜びしとる！というのはのう、あんたらの祈りと、イエス・キリスト様の助けのお陰で、こういうことも（結局）救いにつながると知っとるけえじゃ。わしはとにかく、どがいな（*どのような*）時でも、恥ずかしがらず、大胆であることにより、生きるにしても死ぬにしても、キリスト様が大いにたたえられることをねごうとる（*願っている*）。わしにとっては、キリスト様が命、死ぬことも損にはならん。ほいじゃが、こんなもんでも生きとりゃあ実りのある働きができるけえ、どっちを選んだらええかわしには分からん。生きるか死ぬかで板挟みじゃ。ほんまは（*本当は*）この世を去って、キリスト様と一緒におりたいとねごうとるし、絶対こっちの方がええと思う。ほいじゃが、あんたらのためには、生きとらんにゃあいけん。あんたらの信仰が深まり、喜びに満たされたもんとなるために、生き残って、あんたらと一緒におりたい思うとる。わしが今度あんたらに姿を見せる時、キリスト・イエス様にあるあんたらの誇りが増し加わることができるように、ねごうとる。とにかくキリスト様の福音にふさわしゅう生活しんさい。そうすりゃあ、そっちへ行ってあんたらに会うにしても、離れとるにしても、わしはこう聞くことになるじゃろう。あんたらは霊を一つにしてしっかり立ち、心を一つにして福音の信仰のために力を併せて奮闘し、何があっても反対者の脅しに屈することはないと。（あんたらのその態度こそ）反対者たちには滅びの印、あんたらには救いの印となる。これは神様からのもんじゃ。あんたらには、キリスト様への信仰だけじゃのうて、キリスト様のために苦しむことも、恵みとして与えられとる。あんたらは、わしの戦いを見たし、今も聞いとるじゃろうが、そのおんなじ戦いをあんたらも戦うんじゃ！

第2章

キリスト様にある励まし、愛の慰め、御霊の交わり、慈愛と憐れみの心があんたらの内にあるなら、思いを合わせ、同じ愛を持ち、調和を保って欲しい。それでわしの喜びは満たされる。何をするんでも、自己中心や虚栄からするんじゃのうて、へりくだってお互いに自分より優れたもんじゃ思いんさい。自分のことだけじゃのうて、他の人のことにもしっかり目を向けんさい。よう心に留めときんさいよ。そりゃあのう、キリスト・イエス様がそうされたけえじゃ。

キリスト様は、神の姿であられたのに、神であることにこだわらず、ご自分を無にして、仕えるもんとなり、人間と等しゅうなられた。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた。ほいじゃけ(*それだから*)、神様はキリスト様をたこう(*高く*)挙げ、すべての名にまさる名を与えられた(すべてのもの上に置かれた)。天上のもんも、地上のもんも、地下のもんも、とにかくすべてがイエス様の御名にひざまずき、すべての舌が、「イエス・キリスト様は主です」と告白して、父なる神様がたたえられるためじゃ。

ほいじゃけえ、わしの大切なもん(*者*)らよ、これまでも従順じゃったように、わしらがおる時だけじゃのうて、おらんようになった今こそ従順で、恐れおののきつつ、自分の救いの完成を目指してがんばりんさい。あんたらの内に働いて、みこころにかなう願いを起こさせ、実行させて下さるんは神様じゃ。どんなことでも、かばちをたれず(*文句を言わない*)、理屈をこねず、行いんさい。そうすりゃあ、非難されることのない無垢なもんとなり、この邪悪でいがんだ(*歪んだ*)時代の中で、傷のない神様の子として、命の言葉をしっかり握って、星のようにこの世で輝くことができる。ほいでわしは、走り続けたことが無駄じゃなく、やねこい(*苦しい*)思いをしたことも無駄じゃなかったと、キリスト様の日(再臨)に胸を張ることができる。仮に、わしの血が、あんたらの信仰の礼拝における注ぎの供え物になったとしても(信仰の故に殉教したとしても)、わしは嬉しい。あんたらと一緒に喜ぶ。あんたらも喜びんさい。わしと一緒に喜びんさい。

第3章

最後に、わしの兄弟たちよ、主にあって喜びんさい。前にも書き送ったことじゃが、うずろうしゅう(*煩わしく*)思いんさんな。あんたらのためじゃけえ。あの犬どもに注意しんさい。わりい(*悪い*)連中に気をつけんさい。ただの切り傷に過ぎん割礼を鼻にかける(ユダヤ人のこと)やつらを警戒しんさい。あんにら(*彼ら*)じゃのうて、わしらこそほんまの(*本当の*)割礼を受けたもんじゃ。わしらは神様の霊によって礼拝し、キリスト・イエス様を誇りとし、自らの肉に信をおいとらん。ほいじゃが、肉を誇れいうんなら誇らんこともない。わしと勝負しよういうんなら受けてたっちゃる。わしは生まれて八日目に割礼を受け、イスラエル民族のベニヤミン属の出身で、正真正銘のヘブライ人じゃ。律法についてはファリサイ派、教会を迫害するほど熱心で、非の打ち所がないほど律法を守っとった。ほいじゃが、わしにとって得じゃったこれらのことが、キリスト様によって損じゃ思うようになった。いや実は、わしの主キリスト・イエス様を知ることがあまりにもすばらし過ぎて、それ以外の一切は損にしか思えんのんよ。キリスト様によって、わしはすべてをうしのうた(*失った*)が、それらをゴミとしか思うとらん。キリスト様を得、キリスト様に包まれたいんじゃ。わしには、律法による自分の義しさじゃのうて、キリスト様への信仰による義しさ、信仰を土台として神様から与えられる義しさがある。キリスト様とその復活の力を知ったからには、その苦しみにあずかり、その死の様にも等しくなり、ついには死者の中からの復活に達したいんじゃ。

わしゃあ、はあ(*既に*)それを手に入れたわけじゃないし、完全なもん(*者*)になったわけでもない。どがいにしてでも(*何とかして*)捕まえちゃろう思うて必死なんよ。ほいじゃが実はわし自身がキリスト・イエス様に捕らえられとる。兄弟たち、わしゃあはあ捕らえたとは思うとらん。せんにゃあいけん(*しなければならない*)ことは一つしかない。後ろ

を忘れ、精一杯前に向かい、神様がキリスト・イエス様によって上に召して、お与え下さる賞を得ようと、ゴール目指して一目散に走ることじゃ。成熟したもんは誰もがこがいに(*このように*)考えんにゃあいけん。ほいじゃが、あんたらが別の考えを持つんなら、神様はそれを明らかにして下さるじゃろう。とにかく、わしらは既にある見本を目指して進まにゃあいけん。兄弟たち、わしに習うもんになりんさい。また、あんたらとおんなじように、わしを手本としとる人らを見習いんさい。何度も言うてきたし、今も泣きながらに言うんじゃが、キリスト様の十字架を敵として歩んどるもんがおおいいんじゃ。あんにらの行き着く先は滅びじゃ。あんにらは結局欲望を神とし、恥ずべきもんを誇り、地上のことしか考えとらん。ほいじゃが、わしらの国籍は天にある。そこから主イエス・キリスト様が救い主として(再び)来られるんを、わしらは待ち望んどる。キリスト様は、万物をも従わせることのできる力によって、わしらの卑しいからだを、ご自分の栄光のからだとおなじように変えて下さるんじゃ。

第4章

ほいじゃけえ、わしの大切で敬愛する兄弟たち、わしの喜びであり冠であるもんらよ。主にあってしかっり立ち続けんさい。

ユウオデアとシンティケ、よう聞きんさい。主にあって心を合わせんさい。ほいで、共に重荷を負うてくれるもんにも頼みます。この二人の婦人を支えてやって欲しい。二人は、命の書に名を記されとるクレメンスや他の協力者たちと力を合わして、福音のためにわしと共に戦ってくれたんじゃ。いかなる時にも主にあって喜びんさい。もう一回言うで。喜びんさい。あんたらの思いやりの心がすべての人に知られるようにしんさい。主は近い。どんなことでも、思いわずろう(*煩う*)ちゃあいけん。何事でも、感謝と共に献げる祈りとにより、あんたらの心の内を神様に打ち明けんさい。そうすりゃあ、人知をはるかに超えた神様の平安が、あんたらの心と思いを、キリスト・イエス様にあって守ってくれてじゃ。

最後に、兄弟たちよ、すべて真実なこと、すべて尊ぶべきこと、すべて義しいこと、すべて聖いこと、すべて愛すべきこと、すべてたたえるべきこと、また徳や称賛に値することを心に留めんさい。わしから学んだこと、受けたこと、聞いたこと、見たことを実行しんさい。そうすりゃあ、平和の神様は常にあんたらと共におられる。

あんたらがわしのことを気遣い、行動に表してくれたことを、主にあって大いに喜んどる。今までは思いはあっても具体的に表す機会がなかったんじゃろう。物をもろうたけえ言うとるんじゃない。わしゃあ、どんな境遇にあっても満足することを学んどる。貧しさも、豊かさも、満腹も、空腹も、有り余りも、不足も、どんな状況にも対処する秘訣を授かっとる。わしを強うして下さるお方によって、わしは不可能なことがない。そりゃあそうと、あんたらは、ようわしと一緒に苦しんでくれた。フィリピの人らよ、あんたらも知っとるように、わしがまだ福音宣教を始めた頃、マケドニア州を離れた後、物質的にサポートしてくれた教会はあんたらだけじゃった。テサロニケにおった時にも、あんたらはわしの乏しさを知って、何度も物を送ってくれた。物を期待しとるんじゃない。与えることはあんたらの益になっとると言いたいんじゃ。わしは十分に受けて、有り余るほどじゃ。あんたらからの贈り物もエパフロディトから受け取った。それは芳しい香りで、神様が喜ばれる供え物じゃ。わしの神様は、ご自分の栄光の富をもって、キリスト・イエス様を通して、あんたらに必要なもんをすべて満たして下さる。

わしらの父である神様に、栄光が世々限りなくあるように。アーメン。